

彼女たちはどの親を介護したか

大久保孝治

(早稲田大学)

Which Parents Has She Cared for ?

Takaji Ohkubo

本稿は「全国家族調査」(NFR98)の高齢者サンプル(1920年代コーホートと1930年代コーホート:調査時年齢は58歳から77歳)の中の4人の親(自分の父母と配偶者の父母)がすでに亡くなっている女性(938名)を分析対象として、介護した親の数、親の介護へのかかわりの重度の総量、介護した親の組み合わせ等の合成変数を用いながら、親の介護の「双系化」の趨勢について検証を行った。その結果、1930年代前半コーホートから介護した親の数の増加、親の介護へのかかわりの重度の総量の増加、夫婦双方の親を介護するパターンの増加等が見られることを確認した。すなわち親の介護の「双系化」は人口学的第二世代に属する1930年代前半コーホートの女性たちから始まったのである。

キーワード: 親の介護、親族関係の双系化、介護した親の数、介護した親の組み合わせ、親の介護へのかかわりの重度の総量、人口学的世代

1. 問題の所在

(1) 人口学的第三世代において親族関係は「双系化」する(落合)

「親の介護は長男の嫁の役目」というのが日本における伝統的な規範である。逆に言えば、次男以下の男性と結婚した女性(ただし「跡取り娘」は除く)は親の介護という役目を免除される。しかし、これはきょうだい数も子ども数も多い世代(人口学的第一世代:1924年以前の生れ)や、きょうだい数は多いが子ども数は少ない世代(人口学的第二世代:1925~49年の生れ)までの話で、戦後の「二人っ子革命」によって生じたきょうだい数も子ども数も少ない世代(人口学的第三世代:1950年以降の生れ)には成り立たなくなるだろう、というのが落合恵美子による親族関係の「双系化」の予測である。落合は人口学的第三世代の特徴を次のように述べている。

「もっとも大きな違いは、親を安心してまかせられる「田舎の兄さん」はもういないということです。六〇年代にはベッタリ同居している「田舎の兄さん」がいたからこそ、他のきょうだいはキッパリ別居できたのです。嫁に行った娘も、都会に出た次三男も、それは同じことでした。しかし、現在では、二人に一人は跡取りですし、跡取りとまではいか

なくとも、数少ない二人や三人の子どものうちの一人なのは間違いありません。また跡取りを特別視する考え方も薄れていきますから、仕事や住宅の都合で「跡取り」も親元を離れます。今や跡取りという特権をもった子もいなくなったかわりに、実家の親との関係を断つという「特権」をもった子もまたいなくなったのです。／夫側と妻側、どちらに同居しても、電話するなり訪問するなりというかたちで、もう一方の親との関係を保っていかざるをえない。あるいは、どちらとも別居しても、まったく親との縁を切って自由の身になるわけにはいかない。これがこれからの親との関係のありかたとなるでしょう。」(落合恵美子『21世紀家族へ[新版]』、212-3頁、有斐閣、1997)。

「現代の若者夫婦は、両方の親の間の潜在的な綱引きの、たいへんな緊張関係の中にいます。しかし当の二人も、双方のご両親も、どうぞ肝に銘じてください。現代の若夫婦は、これまで述べてきたような理由で、どちらかの家に入りきってしまうことはできないのです。これは現代の若い世代の人口学的宿命です。それを見誤って、どちらかの家に取り込んでしまおうとすると、どこかに悲劇が生れます。へたをすると、若年離婚だってさせられかねない。これが「双系化」の時代なのです。」(同書、211頁)

(2) 親の介護の「双系化」は第二世代ですでに始まっていた(大久保・杉山)

こうした落合の親族関係の「双系化」の予測を基本的に正しいものとして認めつつ、親の介護における「双系化」は実は人口学的第二世代においてすでに始まっていたことを、私と杉山は指摘した(大久保孝治・杉山圭子「サンドイッチ世代の困難」、藤崎宏子編『親と子：交錯するライフコース』ミネルヴァ書房、2000)。すなわち人口学的第二世代に属する1930年代生れで、東京都S区在住の女性50人の生活史記録(『昭和史と個人史』生活史資料篇、早稲田大学第一文学部社会学専修、1995)を分析したところ、本人が長女(しかも男きょうだいなし)で夫が長男という「跡取り」同士の結婚は1ケースしかないのにもかかわらず、本人が自分の親と夫の親、双方の親の介護を経験しているケースが13(26%)、すなわち4人に1人という高い割合で存在したのである。

しかもこの13ケースの親との同居経験はさまざまであり、具体的には、「双方の親と同居経験あり」が2ケース、「夫の親と同居経験あり」が8ケース、「本人の親と同居経験あり」が1ケース、「双方の親とも同居経験なし」が2ケースであった。これは親との同居経験と親の介護経験とが単純に連動していないことを意味している。事実、50ケース中、夫婦のどちらかが長男・長女(男きょうだいなし)である「跡取り」夫婦は32ケースで、そうでない「非跡取り」夫婦は18ケースであったが、両者の同居経験率ならびに介護経験率を比べてみると、同居経験率は「跡取り」夫婦が75.0%で「非跡取り」夫婦が44.4%、一方、介護経験率は「跡取り」夫婦が75.0%で「非跡取り」夫婦が66.7%であった。すなわち「跡取り」であるか否かは、同居経験を左右する要因ではあっても、介護経験を左右する要因ではなくなっていたのである。

「つまり、双方の親を介護するという事態は、特定の子どもにではなく、どの子どもにも起こりえることなのである。第三世代の親子関係の標準になるであろう「双系化」は、きょうだい数は多くても親族間の空間的距離が大きくなってしまった第二世代においては、実は、すでに始まっていたのである。親を安心してまかせられるはずの「田舎の兄さん」も、田舎を離れることがあったのだ。」(大久保・杉山、230頁)

(3) 本稿の課題

親の介護における「双系化」現象が1930年代生れの女性たちの間ですでに見られていたことを私たちは指摘した。しかし、生活史調査のためサンプル数が50と少なく、対象者の所在地も東京都S区に集中しており、わが国の家族変動を論じるデータとするには妥当性に問題がある。また、親の介護における「双系化」現象が1930年代生れの女性たちの間ですでに見られているとしても、それが1930年代生れの女性たちから始まったことなのかどうかは、より年長の女性たちについて調査してみなければ断定できない。親の介護における「双系化」はもっと前から始まっていたのかも知れず、そうだとすれば、「親の介護は長男の嫁の役目」というのはあくまでも建前で、実際には親の介護は昔から「双系的」であったという意外な結論が導かれる可能性もないとはいえない。

というわけで、本稿の課題はNFR98データを分析して、親の介護の「双系化」の趨勢を検証することにある。

2. サンプルと変数

(1) 対象となるサンプルは4人の親をすでに亡くしている女性

「全国家族調査」では1920年代出生コーホート(調査時年齢:68~77歳)と1930年代出生コーホート(調査時年齢:58~67歳)を対象にして(高齢者用調査票)、対象者の4人の親(本人の父母と配偶者の父母)の看取り(死に至る介護)に対象者がどのようにかかわったかを尋ねている。質問は女性だけでなく男性にも行われたが、本稿では分析対象を女性に限定する。それは「介護にかかわった」と回答した男性が少ないからではなく、男性と女性とでは「介護にかかわった」と回答するときの内容が異なるからである。詳しい説明は本報告書の別の論稿(保坂恵美子「高齢者介護におけるジェンダー構造」)に譲るが、男性の場合は「介護・看病の費用負担」や「話し相手・見舞い」を主たる内容とし、女性の場合は「食事の手助け」や「排泄の手助け」に代表される日常生活の介助を主たる内容とする。通常感覚で「親の介護をする」というとき、われわれがイメージするものは、前者ではなく後者であろう。「介護・看病の費用負担」や「話し相手・見舞い」には時間という資源をそれほど必要としない。仕事を辞めたり仕事を短縮したり(フルタイムからパートタイムへ)しなくとも実行可能な行為である。しかし日常生活の介助はそう

いうわけにはいかない。四六時中スタンバイの状態に自分を置いておかなくてはならないという点で、それは育児に似ている。そして育児が母親の生活に大きな影響を及ぼすように、親の日常生活の介助も介護者（嫁や娘）の生活に大きな影響を及ぼす。だからこそ親の介護の経験は一種の「苦労話」として、つまり語るに値する物語として多くの女性たちによって語られてきたのである。

「全国家族調査」における女性対象者は1920年代コーホートで589名、1930年代コーホートで687名、合計1286名である。しかし、本稿が分析の対象とするのは調査時点においてすでに4人の親全員を亡くしている938名である（生存中の親がいる者以外にも未婚者38名および4人の親の生死について無回答が1つでもある者30名もサンプルから除外した）。そのように絞り込んだ理由は、女性が生涯に何人の親を介護するか、どの親を介護するかの確定したデータを扱いたいからである。生存している親のいる女性のデータはあくまでも暫定的なものであり、介護した親の数や親の種類は今後に変化（増加）の余地を残している。4人の親全員を亡くしている者（生存している親が0人）の割合はコーホートによって差がある（表1）。当然のことながら、年下のコーホートほどその割合は低くなっている。とくに1930年代後半コーホートの該当者は52.4%と半数をやっと超える程度である。もっとも生存している親がまだいるといっても、4人の親全員が生存しているケースは全体で1つもなく、3人の親が生存中というのも全体の0.6%（7ケース）しかなく、一番多いのは生存中の親が1人というケースで、1930年代後半コーホートについて見ればこのケースが33.4%を占めている。生存中の親が1人ということは、対象者は自分の親と夫の親、双方の親（具体的に誰と誰と誰であるかは別として）の死を経験しているということの意味している。

表1 生存している親の数 各セルの上段は%、下段は件数

	0人	1人	2人	3人	4人	合計
1920年代前半 (73~77歳)	96.8 (241)	3.2 (8)	—	—	—	100.0 (249)
1920年代後半 (68~72歳)	89.7 (279)	8.7 (27)	1.6 (5)	—	—	100.0 (311)
1930年代前半 (63~67歳)	74.8 (244)	19.0 (62)	5.8 (19)	0.3 (1)	—	100.0 (326)
1930年代後半 (58~62歳)	52.4 (174)	33.4 (111)	12.3 (41)	1.8 (6)	—	100.0 (332)
計	77.0 (938)	17.1 (208)	5.3 (65)	0.6 (7)	—	100.0 (1218)

注：網掛けの部分为本稿の分析対象となるサンプル

親の看取り（死に至る介護）の「双系化」の趨勢を検証しようとするのであれば、自分の親と夫の親、双方の親の死を経験している「生存している親は1人」のケースも分析対象に加えてもよいのではないか（そうすれば対象サンプルは1146ケースに増え、コーホート全体の94.1%を占めることになる）、という考え方は魅力的である。しかし、結局、この考え方を採用しなかったのは、「生存している親は1人」というときのその親は夫婦双方の母親が多いという理由による（表2）。生存率が一番高いのは「自分の母親」で、次いで「夫の母親」、三番目は数値が急に小さくなって「自分の父親」、そして最下位が「夫の父親」である。この順位は、①男女の平均寿命の違い（男<女）、②両親の年齢の違い（一般に父親>母親）、③夫婦の年齢の違い（一般に夫>妻）⇨夫方の親と妻方の親の年齢の違い（一般に夫方の親>妻方の親）という3つの要因によって説明される。

表2 4人の親の生存率 ()内は人数

	1920年代前半 (73~77歳)	1920年代後半 (68~72歳)	1930年代前半 (63~67歳)	1930年代後半 (58~62歳)
自分の父親	—	—	3.5 (12)	7.6 (27)
自分の母親	3.1 (8)	6.1 (20)	16.7 (57)	30.8 (109)
夫の父親	—	1.0 (3)	1.5 (5)	3.0 (10)
夫の母親	0.4 (1)	4.5 (14)	9.8 (32)	22.5 (75)

生存している最後の親が（夫婦どちらかの）母親のケースが多いということは、将来、その母親の看取り（死に至る介護）が必要な状態になった場合、対象者がそれにかかわる確率は、生存している最後の親が（夫婦どちらかの）父親であるケースに比べて大きいと考えられる。なぜなら、父親が先に亡くなって後から母親が亡くなるケース（一般的なケース）においては、父親の介護の担い手、少なくとも中心的な担い手は、嫁や娘ではなく、母親である場合が多く、嫁や娘が介護の担い手として活躍するのは（残された）母親の介護の場面であるからである。これが親の介護の「双系化」の趨勢を検証するために、母親が生存している割合の高い「生存している親は1人」のケースは外して、4人の親全員が亡くなっているサンプル（確定サンプル）に対象を限定した理由である。

（2）使用する変数と使用できない変数

親の介護の「双系化」の趨勢を検証するために使用する変数は、第一に、対象者が何人の親を介護したか（介護した親の数）である。これは調査票では直接質問していないので、4人の親それぞれの介護経験の有無（1 or 0）を足し合わせた合成変数を作成した。この変数の値が「3」以上の対象者は夫婦双方の親の介護を経験した者である。親の介護の「双系化」を検証する場合のもっとも簡便な変数である。

使用する変数の第二は、対象者がどれだけ深く介護にかかわったか（親の介護へのかかわりの重度の総量）である。調査票ではたんにそれぞれの親の介護へのかかわりの有無だけでなく、その程度（重度）についても尋ねている。すなわち、①「中心となって介護・看病にあたった」、②「中心ではないがかなりかかわった」、③「少しだけかかわった」、④「特にかかわっていない」、⑤「突然の死で、ほとんどする機会がなかった」の5つである。たとえば4人の親全員を介護したもののそのどれもが「少しだけかかわった」場合と、介護した親は2人だけだがそのどちらも「中心となって介護・看病にあたった」場合とでは、はたしてどちらが大変だったであろうか。それは後者である、というのが普通の考え方ではなかろうか。介護した親の数は介護という労働の軽重とイコールではない。そこで「中心となって介護・看病にあたった」に3点、「中心ではないがかなりかかわった」に2点、「少しだけかかわった」に1点、「特にかかわっていない」と「突然の死で、ほとんどする機会がなかった」に0点を与え、4人の親の介護へのかかわりの程度の合計値（親の介護へのかかわりの重度の総量）という合成変数を作成した。値の範囲は「0～12」である。さきほど例にあげた4人の親全員の介護にかかわったもののいずれも「少しだけかかわった」場合は「4」で、介護した親は2人だけだがそのどちらも「中心となって介護・看病にあたった」場合は「6」となり、後者の値が大きく、われわれの一般的な感覚を反映していると言える。

使用する変数の第三は、どの親を介護したか（介護した親の組み合わせ）である。介護した親の数は親の介護の「双系化」を検証する簡便な変数であるが、緻密な変数ではない。なぜなら介護した親の数が「2」の対象者の中にも夫婦双方の親の介護を経験した者はいからである。たとえば自分の母親と夫の母親を介護したという場合がこれに該当する。そこでどの親を介護したのか（介護した親の組み合わせ）という変数が必要になってくる。これも調査票では直接質問していないので、4人の親それぞれの介護経験の有無から合成変数を作成した。具体的には、4桁の数字を設定し、千の位は自分の父親の介護経験の有無（1000 or 0）、百の位は自分の母親の介護経験の有無（100 or 0）、十の位は夫の父親の介護経験の有無（10 or 0）、一の位は夫の母親の介護経験の有無（1 or 0）を表記するように定めた。この結果、最小「0000」（介護経験なし）から最大「1111」（4人の親全員を介護した）まで、 $2 \times 2 \times 2 \times 2 = 16$ 通りの数値（介護した親の組み合わせのパターン）が算出される。たとえば、さきほどの「自分の母親と夫の母親を介護した」というケースは「101」という数値によって表される。実際の分析の場面では、この16通りのパターンは「介護経験なし」「自分の親のみ介護」「夫の親のみ介護」「双方の親を介護」の4分類に集約されて使用されるだろう。

以上の3つの合成変数（介護した親の数、親の介護へのかかわりの重度の総量、介護した親の組み合わせ）が、親の介護における「双系化」（と限らず親の介護への女性のかかわり方の変化）の趨勢を検証するための尺度である。

ところで、ここであらかじめ断っておかなくてはならないのだが、拙稿「サンドイッチ世代の困難」の中で行ったような対象者夫婦を「跡取り」夫婦（夫が長男あるいは妻が男きょうだいのいない長女）と「非跡取り」夫婦（夫が次男以下で妻が男きょうだいのいる長女あるいは次女以下）に分類する作業は本稿では行わない。というよりも行えない。「全国家族調査」には配偶者のきょうだいについてのデータがほとんどないのである。利用可能なデータはわずかに「配偶者の現在のきょうだい数」だけである。これでは配偶者（夫）が長男であるかどうかの判定を行うことはできない。

一方、対象者（妻）のきょうだいについては、「出生きょうだい数」、「現在のきょうだい数」、「現在のきょうだいの上から3人（本人を除く）の性別と出生年」のデータがあるので、対象者が「跡取り娘」（男きょうだいのいない長女）か否かをある程度まで判定できる。たとえば「出生きょうだい数」が「0」の者は「跡取り娘」であり、「現在のきょうだいの上から3人」の中に対象者より年長の者がいる場合は「跡取り娘」ではない。しかし判定できるのはあくまでもある程度までである。たとえば「現在のきょうだいの上から3人」がすべて女性でしかも対象者より年下の場合、対象を「跡取り娘」と判定できるかという、できないのである。なぜなら、調査票では確認できない4人目以下に男きょうだいがいるかもしれないし、すでに亡くなっているきょうだいの中に対象者よりも出生順位の早い者（兄や姉）がいたかもしれないからである（注：出生きょうだいの平均数は、1920年代前半コーホートが4.6人、1920年代後半コーホートが4.9人、1930年代前半コーホートも4.91人、1930年代後半コーホートは4.6人である）。

さらに言えば、親の介護ときょうだい関係について考察しようとする場合、一番重要な情報は「亡くなったきょうだいを含めたきょうだいの中での対象者の位置」でも「調査時点で生存中のきょうだいの中での対象者の位置」でもなく、「親の介護という事態が発生した時点での生存中のきょうだいの中での対象者の位置」である。拙稿「サンドイッチ世代の困難」の中でこの情報を使えたのは、対象者の生活史というインテンシブなデータを用いた分析だったからである。

「全国家族調査」は現代日本の家族の実態をさまざまな側面から明らかにすることを目的としたものであって、特定のテーマ（たとえば親の介護）を研究するために設計されたものではない。いろいろな視点からデータを分析することができる代わりに、特定のテーマについて深い分析を行うことは難しい。それはしかたのないことである。他の論稿の執筆者たちもそうした歯痒さを感じながら分析を進めているに違いない。だからここでは必要な変数の欠如について嘆くのはやめて（それは将来の別の調査に盛り込めばよい）、複数のコーホートにまたがる全国サンプルというデータの強みを生かすことを第一に考えて、単純ではあるけれども、作成した3つの合成変数（介護した親の数、介護した親の組み合わせ、親の介護へのかかわりの総量）についてのコーホート間比較を中心に論を進めていくことにしよう。

3. 分析と考察

(1) 介護した親の数

では、まず介護した親の数から見ていくことにしよう。ここで言う「介護した」とは、親の看取り（死へ至る介護）に「中心となって介護・看病にあたった」、「中心ではないがかなりかかわった」、「少しだけかかわった」のすべてを含むものである。

表3は介護した親の数の分布（0～4人）を4つのコーホート別に示したものである。網掛けをした「3人」と「4人」の列が夫婦双方の親を介護した対象者である（「2人」の部分にも一部そうした者が含まれるが、これについてはひとまず措く）。「3人」と「4人」を合わせると、1920年代前半コーホートは17.4%、1230年代後半コーホートは21.1%、1930年代前半コーホートは26.6%、1930年代後半コーホートは27.8%となる。下の（年少の）コーホートになるほど数値が大きくなっていく。すなわち親の介護における「双系化」は1920年代ならびに1930年代コーホートにおいて1つの趨勢として観測された、と言ってよいだろう。

ちなみに1930年代前半・後半を合わせた1930年代コーホートの「3人」と「4人」の合計の割合は27.1%であり、この数値は拙稿「サンドイッチ世代の困難」において示した夫婦双方の親を介護した対象者（1930年代コーホート）の割合（26.0%）とほぼ一致する。拙稿を発表した時点では、きょうだい数の多い人口学的第二世代に属する1930年代コーホートの女性の4人に1人が夫婦双方の親の介護にかかわっているというデータに確信がもてず、サンプル数の少なさ（50ケース）とサンプルの地域的偏り（ほぼ全員が東京都S区在住）のせいかもしれないと考えていたのだが、全国サンプルでも同じ結果が出たことで、拙稿のデータの妥当性に自信をもつことができた。

表3 介護した親の数の分布 各セルの上段は%、下段は件数

	0人	1人	2人	3人	4人	計
1920年代前半 (73～77歳)	26.0 (61)	20.4 (48)	36.2 (85)	10.2 (24)	7.2 (17)	100.0 (235)
1920年代後半 (68～72歳)	23.3 (64)	29.5 (81)	26.2 (72)	13.5 (37)	7.6 (21)	100.0 (275)
1930年代前半 (63～67歳)	13.7 (33)	26.1 (63)	33.6 (81)	17.0 (41)	9.5 (23)	100.0 (241)
1930年代後半 (58～62歳)	19.5 (33)	26.0 (44)	26.6 (45)	23.1 (39)	4.7 (8)	100.0 (169)

注：網掛けの部分に夫婦双方の親を介護したケース（ただし「2人」の中にもそうしたケースは存在する）。

表4は各コーホートの介護した親の数の平均値を示したものである。1920年代前半コーホートから1920年代後半コーホートにかけては横這いで、それが1930年代前半コーホートで急に大きくなり、しかし、1930年代後半コーホートで再び小さくなる（ただし1920年代コーホートよりは大きい）。この変化はどう解釈すべきだろうか。夫婦双方の親を介護する者の割合は1930年代後半コーホートが一番大きい（ただし1920年代前半コーホートよりは大きい）のだから、単純に考えれば、介護した親の数の平均値も1930年代後半コーホートが一番大きくてよさそうなものだが、そうっていないのは、介護した親の数が「4人」の割合が1930年代後半コーホートは1930年代前半コーホートよりも小さく（4.7%対9.5%）、一方、介護した親の数が「0人」の割合が1930年代後半コーホートは1930年代前半コーホートよりも大きい（19.5%対13.7%）からである。これが1930年代後半コーホートの介護した親の数の平均値を引き下げているのである。

表4 介護した親の数の平均値

1920年代前半 (73～77歳)	1920年代後半 (68～72歳)	1930年代前半 (63～67歳)	1930年代後半 (58～62歳)
1.52	1.53	1.83	1.67

しかし、留意しなくてはならないのは、1930年代後半コーホートは生存中の親のいる者（分析対象でないサンプル）が半数近くを占めているという事実である（表1参照）。4人の親全員がすでに死亡している者の割合は、1920年代前半コーホートで96.8%、1920年代後半コーホートで89.7%。この2つのコーホートは生存中の親が今後すべて亡くなくてもデータにほとんど変動は生じないだろう。いわば「確定したコーホート」である。続く1930年代前半コーホートの場合は、4人の親全員がすでに死亡している者の割合は74.8%である。このコーホートの4人に1人はまだ分析対象になっていない。今後、彼らが分析対象としての資格を得たら、つまり存命中の親をすべて亡くしたら、介護した親の数の平均値「1.83」は多少変動するだろう。多少であって大きくではないのは、新たに参入してくる25%の対象者の動向が既存の75%の対象者の動向と大きく異なるとは考えにくいからである。その意味で1930年代前半コーホートは「ほぼ確定したコーホート」である。これに対して、1930年代後半コーホートは「未確定なコーホート」である。なにしろこのコーホートの2人に1人はまだ分析対象になっていないのだから。新たに参入してくる47.6%の対象者の動向は既存の52.4%の対象者の動向と違っている可能性がある。前者は自分が中年のときに高齢の親を介護した（し終えた）人々であり、後者は自分が高齢のときに超高齢の親を介護することになる（かもしれない）人々である。

私の予測を述べれば、1930年代後半コーホートの介護した親の数の平均値「1.67」は今後上昇していくであろう。その理由は、第一に、高齢の女性の方が中年の女性より無職の

割合が高いので親の介護にかかわる上で支障が少ない。第二に、1930年代後半コーホートの出せきょうだい数（本人を除く）は46人であるが、これは他のコーホートに比べて小さく（直前の1930年代前半コーホートは4.9）、親の介護にかかわる確率もそれだけ大きくなる。第三に、1930年代前半コーホートの「1.83」という数値を突出したものとする理由がなく、むしろ介護する親の数の増加を時代の趨勢と考える方が自然と思われる。

（2）親の介護へのかかわりの重度の総量

介護した親の数のコーホート間比較から、親の介護の「双系化」の趨勢が明らかになった。しかし、親の介護の「双系化」＝親の介護の大変さ（重度）の増加とは必ずしも言えない。前述したように、4人の親全員を介護したとしても、それがすべて「少しかかわった」程度であれば、自分あるいは夫の両親の介護に「中心となってあたった」場合の方が大変さは大きいであろう。そこでこの点、つまり親の介護の「双系化」の趨勢は介護の大変さ（重度）の増加を伴うものであるか否かを検証するために、親の介護へのかかわりの重度の総量をコーホート間で比較してみた（表5）。

表5 親の介護へのかかわりの重度の総量の分布 数値は%、()内は件数

総量	1920年代前半 (73～77歳)	1920年代後半 (68～72歳)	1930年代前半 (63～67歳)	1930年代後半 (58～62歳)
0	26.0 (61)	23.3 (64)	13.7 (33)	19.5 (33)
1	7.7 (18)	10.5 (29)	8.7 (21)	11.2 (19)
2	12.3 (29)	9.1 (25)	13.3 (32)	15.4 (26)
3	11.9 (28)	16.0 (44)	17.0 (41)	12.4 (21)
4	8.5 (20)	10.9 (30)	11.2 (27)	6.5 (11)
5	11.1 (26)	7.6 (21)	9.5 (23)	10.7 (18)
6	13.6 (32)	10.5 (29)	12.4 (30)	11.2 (19)
7	2.6 (6)	4.0 (11)	6.2 (15)	4.1 (7)
8	2.1 (5)	2.2 (6)	3.7 (9)	7.1 (12)
9	1.3 (3)	2.5 (7)	2.1 (5)	0.6 (1)
10	2.1 (5)	1.8 (5)	0.8 (2)	0.6 (1)
11	—	0.4 (1)	0.8 (2)	0.6 (1)
12	0.9 (2)	1.1 (3)	0.4 (1)	—

注：網掛けをした部分は、「親の介護は長男の嫁の役目」という伝統的規範に従って「長男の嫁」が行為した場合に入るゾーン。

12×4=48のセルからなる大きな表なので、漠然と眺めていては情報の意味を的確に読み取ることは難しい。そこで「補助線」を引く感覚で、総量「5」と「6」のセルに網掛けを行なってみる。それは「親の介護は長男の嫁の役目」という伝統的規範に従って「長男の嫁」が行為した場合を想定したゾーンである。一般的には最初に義父が介護の必要な状態になり、彼女はその介護に中心としてではないが（中心は義母である）かなりかかわる（重度2）。続いて義母が介護の必要な状態になり、今度は中心となって介護にあたる（重度3）。こうして彼女の義父母の介護へのかかわりの重度の総量は「5」となる。もし最初に介護が必要な状態になるのが義父ではなく義母であったら、あるいは最初に義父が介護の必要な状態になったときに義母の体力もかなり落ちていたとしたら、彼女は義父母の介護とも中心となってあたることになり、その重度の総量は「6」となる。……とすれば、重度の総量の分布が「6」を超えると急に小さくなる理由も納得できる。「親の介護は長男の嫁の役目」という規範が支配的な社会では親の介護へのかかわりの重度の総量が「6」を超えることはイレギュラーな事態だからである。たとえば重度の総量が「12」、すなわち4人の親全員の介護に「中心となってあたった」者は全体で6人しかいない（いや、6人もいると驚嘆すべきかもしれない）。「6」を超える者の割合は、1920年代前半コーホートで8.9%、1920年代後半コーホートで12.0%、1930年代前半コーホートで14.1%、1930年代後半コーホートで13.0%である。1930年代後半コーホートの数値を「未確定のコーホート」のものとして保留した上で判断するならば、イレギュラーなサンプルの割合は微増傾向にあると言えるだろう。その一方で、1920年代の2つのコーホートでは「0」が重度の総量の最頻値であったが、1930年代前半コーホートでは「3」が最頻値となっていることにも注目すべきだろう。3人以上の親を介護する者が増えると同時に誰も介護しない者が減っているのである。

こうした表5の豊富な情報を平均値という1つの尺度で集約したものが表6である。イレギュラーなサンプルの微増や誰も介護しないサンプルの減少と呼応するように、介護した親へのかかわりの重度の総量の平均値も漸増傾向を示している（ここでも1930年代後半コーホートの数値については判断を保留）。この節の課題は、親の介護の「双系化」の趨勢が介護の大変さ（重度）の増加を伴うものであるか否かを検証することであったが、伴うものであることが検証されたわけである。

表6 介護した親へのかかわりの重度の総量の平均値

1920年代前半 (73～77歳)	1920年代後半 (68～72歳)	1930年代前半 (63～67歳)	1930年代後半 (58～62歳)
3.17	3.25	3.68	3.30

(3) 介護した（中心となって、あるいはかなりかかわった）親の数

本稿ではここまで、介護した親の数を見ていく場合、親の看取り（死へ至る介護）に「中心となって介護・看病にあたった」、「中心ではないがかなりかかわった」、「少しだけかかわった」のいずれかに回答したすべてのケースを含めてきたが、この節では試みに「少しだけかかわった」と回答したケースを除いて集計を行なってみる。対象者の中には謙虚な人もいて、実際はかなりかかわっているのに「少しだけかかわった」と回答しているケースもあるかもしれない。しかし、一般的な語感としては、「中心となって介護・看病にあたった」、「中心ではないがかなりかかわった」の2つと「少しだけかかわった」の間には少なからぬ開きがあるように思う。介護へのかかわりの重度の総量という合成変数を作成するために、本来は順序尺度であるものを「中心となって介護・看病にあたった」に3点、「中心ではないがかなりかかわった」に2点、「少しだけかかわった」に1点、「特にかかわっていない」と「突然の死でほとんどする機会がなかった」に0点を与えて間隔尺度のように扱ったが、「中心ではないがかなりかかわった」と「少しだけかかわった」との間の距離は、「中心となって介護・看病にあたった」と「中心ではないがかなりかかわった」との間の距離よりも相当に大きいように思う。もちろん介護経験の有無を第一義的に問題にする以上、「少しだけかかわった」を「介護経験あり」のカテゴリーから最初から外すわけにはいかないが、そうした広義のカテゴリーとは別に、親の介護＝重労働という一般的なイメージに則して、「中心となって、あるいはかなりかかわった」ケースに絞り込んだ分析も必要であると考えられる。

表7は狭義の「介護経験あり」のカテゴリーを用いて介護した親の数の分布（0～4人）をコーホート別に示したものである。表の形式と各コーホートのサンプル数は広義の「介護経験あり」のカテゴリーを用いた表3と同じであるが、当然のことながら、分布の状況が大きく異なる。一番大きな違いはどのコーホートでも「0人」が15～20%増えて1930年代前半コーホートを除く3つのコーホートで最頻値となったことである。その反動で夫婦双方の親を介護した「3人」と「4人」が減って、網掛けの部分で10%を超えるセルは1つもなくなってしまった（表3では「3人」はどのコーホートも10%を超え、1930年代後半コーホートでは20%台を示していた）。しかし、そうした分布の変化にもかかわらず、表7のデータは、表3の場合ほどはっきりとはしていないものの、やはり親の介護の「双系化」の趨勢を示している。すなわち「3人」と「4人」を合わせた割合は、1920年代前半コーホートが7.7%、1920年代後半コーホートが9.8%、1930年代前半コーホートが10.4%、1930年代後半コーホートが10.7%と微増ではあるが一貫した増加傾向を示しているのである。それは介護した親の数の平均値のコーホート間の推移（表8）が、広義の「介護経験あり」のサンプルを用いて計算した平均値の推移（表4）とほぼ相似形を成していることから裏付けられるだろう。

表7 介護した親の数の分布

各セルの上段は%、下段は件数

	0人	1人	2人	3人	4人	計
1920年代前半 (73~77歳)	41.3 (97)	25.5 (60)	25.5 (60)	4.3 (10)	3.4 (8)	100.0 (235)
1920年代後半 (68~72歳)	37.8 (104)	30.5 (84)	21.8 (60)	6.5 (18)	3.3 (9)	100.0 (275)
1930年代前半 (63~67歳)	29.5 (71)	33.6 (81)	26.6 (64)	8.3 (20)	2.1 (5)	100.0 (241)
1930年代後半 (58~62歳)	39.1 (66)	27.2 (46)	23.1 (39)	8.3 (14)	2.4 (4)	100.0 (169)

注：ここでの「介護した」とは「中心となってあつた」と「中心ではないがかなりかかわつた」で、「少しかかわつた」は含まない。網掛けの意味は表3に同じ。

表8 介護した親の数の平均値

1920年代前半 (73~77歳)	1920年代後半 (68~72歳)	1930年代前半 (63~67歳)	1930年代後半 (58~62歳)
1.03	1.07	1.20	1.08

注：「介護した」の意味は表7に同じ。

(4) 介護した（中心となって、あるいはかなりかかわつた）親の組み合わせ

狭義の「介護経験あり」のカテゴリーを用いて、介護した親の組み合わせを調べてみよう。表7では（表3でも）、介護した親の数が「3人」と「4人」のケースを合計して夫婦双方の親を介護したケースを算出したが、この方法は簡便だが緻密ではない。「2人」のケースの中にも夫婦双方の親を介護したケースは含まれているからである（たとえば自分の母親と夫の母親を介護したケース）。つまり夫婦双方の親を介護したケースは本当はもう少し（あるいはもっと）多いのである。それを正確に算出するためには、介護した親の組み合わせを調べる必要があるのである。

表9は前述した介護した親の組み合わせ（16通り）の表記法に従って、コーホート別に各パターンの割合を示したものである。介護した親が「2人」のケースの中で夫婦双方の親を介護するケースは、「0101（実母と義母）」と「0110（実母と義父）」と「1001（実父と義母）」と「1010（実父と義父）」の4パターンである。この4パターンの中では「0101（実母と義母）」が比較的ケースが多く、1920年代コーホートで3~4%台、1930年代コ

一ホートでは7%台の数値を示している(増加傾向あり)。逆に一番ケースの少ないパターンは「1010 実父と義父」でどのコーホートでも1%に満たない。間に位置する残りの2つのパターン、「0110 (実母と義父)」と「1001 (実父と義母)」とでは後者の方が多少ケースが多いようである。

夫婦双方の親を介護する場合、(自分の親であれ夫の親であれ)母親が介護の対象となりやすいという傾向は、介護した親が「2人」のケースだけに当てはまるものではない。介護した親が「3人」のパターンで多いケースは「0111 (実母と義父母)」と「1101 (実父母と義母)」であり、「1011 (実父と義父母)」や「1110 (実父母と義父)」は少ない。また、介護した親が「1人」のパターンで多いケースは「0100 (実母)」や「0001 (義母)」であり、「1000 (実父)」や「0010 (義父)」はそれよりもケースが少ない。

表9 介護した親の組み合わせの16パターンの割合 ()内は件数

16パターン	1920年代前半 (73~77歳)	1920年代後半 (68~72歳)	1930年代前半 (63~67歳)	1930年代後半 (58~62歳)
0000 (介護経験なし)	41.3 (97)	37.8 (104)	29.5 (71)	39.1 (66)
0001 (義母)	10.2 (24)	13.1 (36)	10.4 (25)	7.1 (12)
0010 (義父)	4.7 (11)	3.3 (9)	3.3 (8)	3.0 (5)
0011 (義父母)	8.5 (20)	6.5 (18)	8.3 (20)	7.1 (12)
0100 (実母)	8.1 (19)	9.5 (26)	12.0 (29)	11.2 (19)
0101 (実母と義母)	4.7 (11)	3.6 (10)	7.5 (18)	7.7 (13)
0110 (実母と義父)	1.3 (3)	0.4 (1)	1.2 (3)	0.6 (1)
0111 (実母と義父母)	1.3 (3)	2.2 (6)	3.7 (9)	4.7 (8)
1000 (実父)	2.6 (6)	4.7 (13)	7.9 (19)	5.9 (10)
1001 (実父と義母)	1.7 (4)	2.2 (6)	3.3 (8)	1.8 (3)
1010 (実父と義父)	0.9 (2)	0.7 (2)	—	0.6 (1)
1011 (実父と義父母)	—	1.5 (4)	0.8 (2)	—
1100 (実父母)	8.5 (20)	8.4 (23)	6.2 (15)	5.3 (9)
1101 (実父母と義母)	2.1 (5)	2.2 (6)	2.5 (6)	3.0 (5)
1110 (実父母と義父)	0.9 (2)	0.7 (2)	1.2 (3)	0.6 (1)
1111 (全員)	3.4 (8)	3.3 (9)	2.1 (5)	2.4 (4)

注：便宜上、本人の父母を「実父母」、夫の父母を「義父母」と表記。なお、「介護した」の意味は表7・8に同じ(狭義の「介護経験あり」)。

表 10 は、介護した親の組み合わせの 16 パターンを「介護経験なし」「自分の親のみ介護」「夫の親のみ介護」「双方の親を介護」の 4 分類に集約したときの両者の対応関係を示したものである。介護した親の数と 4 分類が対応するのは「介護経験なし」＝「0 人」の場合のみで、「自分の親のみ介護」と「夫の親のみ介護」には「1 人」と「2 人」の場合があり、「双方の親を介護」には「2 人」と「3 人」と「4 人」の場合がある。親の介護の「双系化」を検証しようとするときに、介護した親の数を使うのは簡便だが緻密ではないということの意味がよく理解されると思う。

表 10 介護した親の組み合わせの 4 分類と 16 パターンの対応関係

4 分類	16 パターン
介護経験なし	0000
自分の親のみ介護	0100、1000、1100
夫の親のみ介護	0001、0010、0011
双方の親を介護	0101、0110、0111、1001、1010、1011、1101、1110、1111

というわけで、最後に、介護した親の組み合わせの 4 分類の割合をコーホート別に示したのが表 11 である。「未確定のコーホート」である 1930 年代後半コーホートのデータについては保留して言えば、「介護経験なし」は減少傾向、「自分の親のみ介護」は増加傾向、「夫の親のみ介護」は横這い状態、そして「双方の親を介護」は増加傾向にそれぞれあると言える。本稿の主題である親の介護の「双系化」の趨勢については、1930 年代前半コーホートから始まったと結論付けてよいだろう。

表 11 介護した親の組み合わせの 4 分類の割合 () 内は件数

4 分類	1920 年代前半 (73～77 歳)	1920 年代後半 (68～72 歳)	1930 年代前半 (63～67 歳)	1930 年代後半 (58～62 歳)
介護経験なし	41.3 (97)	37.8 (104)	29.5 (71)	39.1 (66)
自分の親のみ介護	19.1 (45)	22.5 (62)	26.1 (63)	22.5 (38)
夫の親のみ介護	23.4 (55)	22.9 (63)	22.0 (53)	17.1 (29)
双方の親を介護	16.2 (38)	16.7 (46)	22.4 (54)	21.3 (36)

注：網掛けした部分は親の介護における「双系化」の趨勢を示す。なお、「介護した」の意味は表 7・8・9 に同じ（狭義の「介護経験あり」）。

4. おわりに

拙稿「サンドイッチ世代の困難」では、サンプル数が 50 と少なかったために、対象となった 1930 年代コーホートを前半・後半に分けて分析することができず、そして 1930 年代コーホートで双方の親を介護した者の割合を対象者の生活史資料の分析から 26.0% と算定したが、本稿では、1930 年代コーホートだけで 687 名、それに 1920 年代コーホートが 589 名の合計 1286 名の大量サンプル（ただし、実際に分析の対象とした 4 人の親全員を亡くしている 938 名）の統計的データを分析して、1930 年代前半コーホートの女性で双方の親の介護を（中心となって、あるいはかなりかかわって）した者の割合を 22.4% と算定した。また、この前後のコーホートとの比較を行ない、親の介護の「双系化」が始まったのが 1930 年代前半コーホートであるとの結論を得た。まさに全国サンプルを用いた分析ならではの成果である。

今後の課題としては、「全国家族調査」には欠けていた夫婦双方のきょうだい関係についての質問を盛り込んだ全国規模の調査を企画し、きょうだい関係変数（具体的には、男性については長男であるか否か、女性については男きょうだいのいる長女であるか否か）を使って夫婦の類型化（「跡取り」夫婦と「非跡取り」夫婦）を行ない、それを説明変数の 1 つとして用いて、親の介護をその一部として含む親族関係の「双系化」の趨勢について検証していきたい。

(2001 年 8 月 20 日提出)

文部省科学研究費基盤研究 (A) : 10301010

家族生活についての全国調査 (NFR98) 報告書 No. 2-6

現代家族におけるサポート関係と高齢者介護

Support Resources and Care for the Aged of the Contemporary Family

石原邦雄・大久保孝治 編

2001年9月

日本家族社会学会
全国家族調査 (NFR) 研究会